
高校生日記？

そうイヤー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生日記？

【Zコード】

N6414A

【作者名】

そうイヤー

【あらすじ】

何処でもいる？高校生の生活です！

第1話・朝（前書き）

最後まで読んでいただけると幸いです。

第1話・朝

チュン、チュン。

小鳥が朝日を浴びて鳴き出す。

「うへん……」

それを聞いて嫌々起きる少年がいた。その少年は起きて自分を鏡で見る。

「うん。 今日もバツチリだな。」

「なに鏡を見て一いや一いやしてんのよー朝つぱらからー。」

「何だ。 奈々葉か。」

「何だとは何よ。」のナルシストー。」

「それはビリヤーに傷つくな。」

「うへん。 ロツク。」

「だから人の部屋に入つて来て兄ちゃんをいじめるな。」

「まあいいや。 優にいじ飯だつて。」

「わかった。」

一様読者に説明しよ。う。

俺は木ノ下優祐。清流高校の2年生でもうろん男だ。

身長は160センチぐらいで髪は黒で顔立ちは女っぽい何とも普通な高校生だ。

それからさつき部屋には行つてきた奴は木ノ下奈々葉。同じ清流高校に通つている1年生だ。もちろん妹もある。身長は俺と一緒にいるかな?顔はまあまあかわいいほうでモテるほうだ。どこまでも真つすぐ綺麗な明るい赤の髪が僕と全く違つてる。そして誰に似たか分からぬのが物凄い口が悪い。といつか毒舌なのかな!どれだけいじめられたことか……

まあこんな感じですね。

そんな事考えながらしたにおつる。

「あらおはよーん 優ちゃん」

出た親バカ。

「……おはよ。」

「あら!挨拶してくれるなんてママさん感激」

「挨拶しないと泣いて、何で挨拶してくれないの!ママさんの愛情が足りないのね!じゃあ愛のチューで はいおいでチューとかいつてるだろ!」

「あらあん ばれちゃつた!てへつ(笑)」

「てへつじやねーよ!..」

「まあまあ一人とも!時間が無くなるよ!..」

この人は木ノ下麗子。年齢は永遠の二十歳らしい。それだったら俺

を産んだとき19歳とこり10となる。せひおつこつてギネスのるから嘘である。それとTの家には禁句がある。それは……

「おばあっ」

である。もしも聞こえたら即口の朝口が見えないことに気がつく。おばあは怒ったときは恐いのだ。

「あれでおふくろ。朝はなんば?」

セレブのおふくろ

「あ・た・し・ょ」

「セレブ奈々葉行か。」

「まつてえーママを置いていかなこで」

「うわああーおふくろ半分脱げてゐつてー。」

「だつて朝!」せんせ私!食べやつてー。」

「逃げる!奈々葉ー。」

俺と奈々葉は慌てて家を出た。

第一話 ストーカーな隆

急いで俺と奈々葉は家を出たわけだが……

「いよいよ！ 優祐～！」

きた。第一のくるくるパー野郎。

「なんだ。隆。」

「なんだ。とは連れないなあ～！ 淋しそうな優祐とせつかく俺が一緒に登校してやろうとしてるのにさ～。」

「隆が淋しいからだろ！ 每朝いつも人ん家の前で『まだかな…グヘッ』とか言つてるくせに！ だから近所の皆様が朝は遠回りして保育園に連れていくてんだよ～！ この家を通らないよつてな。」

「そんなはずはない！ 俺は最近みるぞー子供と一緒に歩いているおじさんを！」

「ほう。」

「黒いサングラスをかけて子供にキャンディーを上げて一緒にどこかにいく見るからに怪しい家族。」

「明らかに誘拐だろがアアアアアアアア！」

「でも奥さんラシキ人が来て、『早く乗つて』って行つて連れていつたがな！」

「ああ……アホダ……何でお前はそんなにアホナシダ。」

頭をかかえながら隆に俺は聞いた。隆は少し考え方を開く。

「生れつきかな！」

いつちやつたよこいつ。満面な笑みでいつちやつたよ。考え方なかつたからだな。満面の笑みなら許してくれるみたいな。うん。……死ね！

「！？ぐひゅ！……う……」

おもいつきじ腹に右ストレート。明らかに痛い。これはドクターストップだな！

「ねえ優にい。早く行こうよ。」

「そりだな！この馬鹿は……ほつて行こうか！」

「うん」

あ！一様説明しましようか！

さつき死んだやつは、田中隆たなか たかし小さい頃からの幼なじみで同じ清流高校に通っている。もちろん同じ学年だ。去年までは一緒のクラスだったが、今年はクラスを離れた。俺は最高だったが隆は泣きながらしがみついて『何で俺はお前と離れなきやいけないんだよお～！あれか！このまま離す気ですか！先生よ！いや神よ！何なんですか！』とかいつてた。俺にとつては知らないよ。って感じだった。それからストーカー見たいになつたのです。こちらにすればいい迷惑ですね。全く……

「ねえ。優にい！」

「どうした？」

「後ろから変なの走って来てない？」

俺は後ろを恐る恐る見てみる……

「優～祐～えー！」

「奈々葉。」

「何優にい。」

「逃げるか。」

俺達はやつぱり逃げる」とにした。

だつてさすがに恐いよ。地面を這いながら普通の歩く程度より早い

早さでおつてくるんだもん。誰だつて逃げるよ。

そのまま奈々葉と別れ教室に逃げ込んだ。

「ふう……疲れるわあ。」

「毎日変態に追われて大変だねえ！」

「あ。田舎さん！ホントなんですよ。助けてくださいよー。」

「優～祐～！」

きたよー！」今まできちゃつたよー！

「円香さん助けて！」

「わかつたわよ そのかわり後から買い物着いて来てね 」

「はい！買い物にでもなんでも行きますからー！」

「了解」

この優しい人は、高円寺円香さん（こうえんじまどかさん）俺が高校生になつてから初めて友達になつた人だ。

身長は167センチぐらいでどつちかと言つと姉さんつて感じなんだ。真っ直ぐ腰の辺りまでのびた黒の綺麗なストレーントの髪で、半端なく力が強い。柔道をやっててクロオビだつたりするしね。隆とも知り合いで、犬猿仲だ。「円香～！また俺のスイートタイムを邪魔する気かあアアアアアアア！」

「知らないよ。優祐にストーカー見たいに張り付いてるのがホントにスイートタイム？笑わせる。」

「ば、馬鹿にするなあ！」

「ふふつ。バカネエ～隆は

「円香……お前口口スケ！」

「口口スケ？キテレツ大 科の？あいつ大丈夫か？

「俺は大丈夫だー！優祐！」

「うわあ～「つざわい」。親指立てながら笑うなよ～。しかも俺が思ったこと読むなよ。

「円香さん～」

「なあ～ここ～？」

「やつて下をいな

「了解～」

了解と言つた瞬間隆は吹き飛んで廊下にいた。

「蹴り一発ですか　さすがです。」

「じゃあ帰り着いて来てね」

しまつた。円香さんの買い物は、ヤバイぐら～に量が半端ではないのだ。

「また今度に……

「じゃあ放課後ね」「ま、円香さん～また今度に……

「じゃあ放課後ね」

「振り切れない……

「またやつくり買い物はしまじょ～」

「放課後ね」

「はー……。」

ああ。満面の笑みで頼まれちゃ勝てない……

「来なかつたら殺しちゃつぞ」

「

「さりげなく危ないこといわないで下さい……」

結局放課後買い物に付き合わされることになりました。

第三話 田舎者と買い物

授業がなんなく終わって……

～～～放課後～～～

逃げるか。

「優祐ひやん～」

「ぱつ……

「エリ君に会ってたのかなあ？」

「こやま～トイレ～」

「嘘こいつたう殺こいつぞ

恐こよ……。

「じやあ行きましょうか
「はー」

やうして田舎者と買い物に出たわけですが……

「なあなんで隆がいるんだい？」

「優祐にここまで来たー！」

おつと満面の笑みで走り込んで来たぞー。まじで死ねばーこのこと。

「田舎さんへやひやつてくださいー！」

次の瞬間

「フア イヤーー！」

ビリかに飛んでこつた。

「わ行せよしょーか。」

セントセント来たといひや、【なんでも揃つてねと黙つよー】といふ店だ。なぜに疑問系かわからないが以外となんでも揃つてこる。

「わーー 今日は何を買おつかしうねー」

「あまり買わなーでくださこよー」

「わかつてゐわ さてと……。」

いそいそと店の中に入つて、田舎さんと隆……えー？ なんで！？ あこづりつかに吹つ飛んでいったはず……。の近くに落ちたのか……。

「わーー 優祐の服をなにか買つてやるかなーー」

「気色悪こわあー！」

「ベブルコアリーーー！」

綺麗な放物線を描いてマンホールの中へホールインワン…「うん…我ながらナイスショット！」

「さてと買こう物しようつかな。」

ある程度自分の買いたい物を終わらして田舎さんのところにこへと…
…何だあの山。服積み過ぎでしょ。

「あー…もうよいいで終わるから一時間ぐらい待つて」

もうついよこつて時間じゃないだろ。明らかにまだまだかかるだろ。

「まあ今日はこれくらいにしようつかな」

やばい…服のタワーが…何ですかあの量。

「今日はかなり押さえたわね。」

おーおー。どこがだよ…

「会計三万円ちょっとになります。」

「めつちや安めね。」

せつこつて田舎さんは諭吉さん3枚を出して買いたい物を済ました。問題はどう持つかだ。どう考へても一人じゃ持てない…

「優祐」！

やつを使つか……

「隆君」

「どうしたー優祐！」

「働け。」

「優ちやん」めんね～お礼に御飯でも食べに行こうね
「そのまえに荷物重くないですか？」

「御飯でも食べに行こうね

逆らえない……

「御飯でも食べに行こうね

「はー……

「じゃああそこに行こうね

円香さんが指差したのはどうでもありそうなカフュを指差した。

「いらっしゃいませーーーお客様ですねー奥の席へどうぞーーー」

隆も一緒にたか……

「ま、いいかー！」

隆を合わせた3人で席に座つた。

「私は「コーヒー」で。」

「じゃあ俺も...」

「じゃあ俺も優祐と同じで...」

「円香さんと一緒にいいだろ...」

「ねーねー！優祐！」

「どうしました円香さん？」

「私が買つた服来てみる？」

「いやいやいやー俺が女の服似合つ覗無いじゃないですかー...」

「似合つはずだぜー優祐ならー...」

満面な笑みかよ.....

「ねー一回だけー！」

そおいつて出してきたのはいかにも危ないビキニだ。つかこれって
服なのか？

「服だから安心してねー！」

「いや危ないですー！」

「大切なものが出来ちゃつかひへ。」

「俺はみたいぞーーー！」

「おまえはだまれーーー！」

「びふあーーー！」

「ふう。馬鹿は死んだか。って馬鹿は死んでも直らないか。

「んで着てみてよーーー！」

「いや遠慮せさせていただきます。」

「着てみてよーーー！」

「いや…………それは…………」

「着てみてよーーー！」

そんな恐い目で見ないでください。つか手がグーになつてゐるしー殺される…………

「ねえーーー似合つてしまふーーー！」

結局その服?を着せられました。しかも隆に『真を取り戻せとや。

第4話 変態つて……（前書き）

なんか最後まで書きたかったんですが保存できなくて中途半端な終わり方になりましたが気にしないで読んでやってください。

第4話 変態つて

なんだかいろいろあつたけど今日はかなり疲れたなあ」とか考えながら帰路についた優佑は……

優佑

隆に捕まつていた。

「優佑ちゃん連れないじやん！」

「つひさい！ 变な写真撮りやがつて………… ああお前と出会いわなけれ
ば俺は汚れてなかつた…………」

「俺のせいぢやないぜ！優佑の本能で今のお前になつてるんだぜ！」

きもいわ。

お腹に正拳を一発！

「ぬるいわー！ふははははー！」

かわされた！」
——

「ふはははは……グヌオツ！」

かわされたので股間の紳士に蹴りを一発！そして倒れた隆にネリチヤギ（踵落とし）を腹部に一発叩き込んだ。これでしばらくは動けまい。

「俺はかえるからなあーあとさつき撮影をられた写真は全部没収な。

「

「ぬおー おああー それだけは堪忍をー。」

「無理。没収。」

「ネガだけはー ネガだけはくださいまじー」

うわあーうねうねしながら頼んでるよ。気持ち悪いなあ。ネガと写真取り替えして知らん顔してかえろつと…………ん? 何だこのアルバムは!

「みるなあー お願ひだー みるなあー」

「うん。わかつた!」

「おおー さすが優佑ー!」

「全部見とくわ。」

「これで俺の写真が出て来たら困るしねえ!」

⋮
⋮
⋮
⋮
⋮
⋮
⋮

「なあ。コレナニ?」

「優佑「レクシヨンだー!すばらしこだりー.」

予想はしてたけど……

「没収~」

「や、やめてくれえ……」

「なんか文句ある?」

「もののすごい隆が齎えでる。多分物凄い何かに齎えでるんだうわ
恐い恐い。」

そのまま隆を放置して帰った優佑だったが……

「おかえり~ 優佑ひやん~」

忘れてた。ここには部屋に帰る間での最終艦があつたんだ。もしこ
つき没収した写真がばれたら大変だ。

「あら? 優佑ひやん 何を持つてるのかしら~?」

「なんでもないよーってか何も持つてないよーほりー

「俺は鞄の中に全てを突っ込みしらばっくれる」とした……が、

俺は鞄の中に全てを突っ込みしらばっくれる」とした……が、

「あ～？ なにか落ちたわよ～。むかさん見てみなさい～」

「やべえ！ お袋の顔なんか興味を持つたときに出た顔になつてやがる…。じつじつ距離を詰めてくるお袋。全てを諦めかけてた瞬間。

「おかあさん。体操のお兄さんがやつてる美容について運動始まつてるよ。見ないの？」

「まあ～ やだこんな時間？ 体操のお兄さん見なきゃ～」

「俺のことなんて忘れたようにリビングに向かっていった。いやあ～助かりましたな。今回は体操のお兄さんに感謝ですな。」

「優にい。なんで自分の写真を撮つてるの？ やつぱナルシストだつたんだ。」

「おいつて階段をテクテク上がつていいく奈々葉。

いやあ～ 全てが終わりましたな。ハハハハハ。

「ハハハ。サテオヘヤーモドロー。ハハハハハ。」

俺は若干おかしくなりながら部屋に戻った。

「お邪魔しないようにお邪魔してるやー。」

「なんでいるんだ。テル。」

「え？ 暇だから。」

「こいつの名前は内山輝樹。小さい頃からの連れだ。何で言つか腐れ縁と言つか腐れ縁だ。」こつは隣町の幻舞高校に通っている。

「それで、お前が来るつひ」とせなんかあつて来たんだろ。用件をいいなよ。」

「鋭いねえ～さすが俺の親友だ！ んでだ。話つてこうのはな……」

「うんうん。」

「今5月の半ばだら～。」

「うんうん。」

「それなのにまだここのまつりつけてる家があるんだぜー～。超受けれる～！」

「うん。帰れ。」

「何だよ～つれないなあ～。」

「うるさい。俺は今日いろいろありすぎて疲れてるんだ。一刻も早く睡眠が取りたいんだ。今何時だと思つている。」

「え？ 9時2分！」

「分かってるなら帰つてくれ。俺は九時に寝ないと駄目なんだ。」

「またまた～！ そんなこといつてなんか変なことじょつとしてない

だらうなあー！」

「お前と違うんだテル。だから帰れ。あと人ん家に来るときは電話くらこしろ。」

「わかつたよーまた明日来るからなあー！」

ふざけるな。これ以上こられてもこっちがかなり困る。毎回こいつは自慢かくならない話をして帰るからな。この前なんて、『猿も木から落ちるんだって！ギヤハハだせーの！』とか言つてやがった。当たり前だ。猿にだつて失敗はある。なんでも出来る猿はこの世にいない……はずだ！

「まあ帰るわー！」

「ああ。」

そおいつてテルは帰つていつた。

「全く……まあいいか。つかあの鞄一杯に入つての写真をビツビツ……って奈々葉に見られた……」

やばい。2番目に見られてはいけないやつに見られてしまつた……俺はどおすれば……

その時、ゆっくり扉が開く。

「ナルシストつるやこよ。」

「奈々葉ーあれには誤解が……」

「うつ セコ。変態ナルシスト。」

「どいつらへんが変態なの？」

「全て。じゃ。」

「ま、待て奈々葉…」

そのまま帰つていつた。どうしよう。俺このままだったら変態ナルシストのままだよ。よし。明日は休みだしどこかに連れてていつてやるか。でも誘い方が浮かばない。よし。練習するか。

第5話 妹を街に誘おひー！

妹を自然に誘う方法その1

自然に部屋に入り、

「なあ奈々葉ー！」

「なに?」

「明日お兄ちやんと一緒に遊ぼひー。」

「やだ。なんで口コロノ変態ナルシストと遊ばなきゃいけないのよ。

」

まづいまづい！変態ナルシストを無くしてほしーのに逆にロリコロン
が混ざりますやん！そりやあ～年下は……ねえ～読者のみな
さん！

共感がないだと～～まづい～のままでは俺のイメージがホントに
ロリコロン変態ナルシストになってしまひ。

……まあいい次！

妹を自然に誘う方法その2

自然に部屋に入る 奈々葉とばつたり遭遇 気まずい空気が流れる

空気を変えるため映画のチケットを取り出す 奈々葉にチケットを渡す 破られる………… ロリコン変態ナルシスト決定。

「くわあーなら最後の作戦をー！」

妹を自然に誘う方法その3

奈々葉の部屋に入り………… 踊つてみる もちろん冷たい目をされるもはやロリコン変態ナルシスト決定！

無理だ。俺は一生ロリコン変態ナルシストの肩書を背負つて行かなきゃいけないのか…………

一人で泣きながら考えていると、

「優にい？」

「は」「やー？？？」

めちゃめちゃ裏声になつてますー助けてくださいー！

「なに驚いてるの。まあいいや。そういうえば優にい明日暇？」

「暇つていつたら暇だーどうしたんだ？」

よしーーー今は平然を装つしかないな！

「よかつたあーじゃあ明日買い物ついてきてよー。」

「おう。わかつた！」

「じやあ明日朝起」(してこ来るから起きてね)

「わかったよー。」

「じやあおやすみなれーお兄ちゃんー。」

そうこつて奈々葉は部屋を出てこつた。

一方優祐は……嬉しそのあまり暴れていった。

「おいおいー俺が誘おうとしたのに奈々葉から誘つてきたぜーヤツ
ホオイーー。」それでロリコン変態ナルリストから脱出出来るぜー。」

興奮のあまりおかしくなつてゐるようだ。妹に誘われて嬉しいかお兄ちゃんと言つて嬉しいのかは謎である。とこつよつロリコンは優祐の勝手な妄想である。

やつして夜は静かに過ぎていつた。

第6話 妹ヒート・ア・ホー

チヨン、チヨン。

いつもは不愉快の鳥たちの泣き声も全然気にならず俺は起きた。するとヒートと階段を駆け上がる音が聞こえたのでひょっと寝たふつをじみつとして布団に潜り込んだ。すると扉が開く音が、そして部屋の中に入ってきた。そして驚かそうとした優祐は布団から顔を出して、

「おまよひ奈々葉ー」

「わあー…」

「も～優祐ちゃんたら脅かしたがりね～ ママささビッククリー！チヨーベッククリー！」

なせかオフクロド、そしてベビードライビングヘッドしてました。やしたらアタヒと階段を駆け上がる音が……無論奈々葉である。

「お兄ひきさん朝…… つぐママー向かってひるのー…」

「優祐ちゃんたらママヒート熱いヒューリーしてくわれひて読んだからそれを実行しようとね 人生は何語とも有限実行よ！だからママヒート熱いヒューリーをひょうだい！」

「こせこせーわすわかんねー！」

「優に。最低。」

お兄ちゃんから普通の呼び方に戻つただとおー? ランクが下がつた
? 困る。非常に困つた。ど、どうすれば?

「優祐ひやと! 热いチューをママさん! 早く!」

「ええいー! つるさー! 奈々葉これは勘違いだ!」

「うわわこママコン変態ナルシス。」

「つちはランク上がつてゐー! ハハハ。ワタシニハドウスルコトモ
デキナイヨ。カミサマ。イマシタラアワレナワタクシラタスケテク
ダサイ。

「つかママコン変態ナルシスさん。『飯出来るから。じや。』

「ま、まーーー朝じさんは何なんだ?」

「こくら井。」

朝からそれはないだろー。

シシコム前に奈々葉は出でていった。つか今日の買ひ物は……

「ま、朝飯食つて考えるか。」

とつあえず食べにリビングに降りてみる。そして奈々葉が言つてた
いくじ井を平らげて、

「まずは行くのかどうかだなー!」

2階に上がり奈々葉の部屋に向かつた。すると、

「お兄ちゃん！」

「な、な、奈々葉ー！」

かなんじ動揺してしまったそ？

「早く着替えて行こうよ」

- ۱۰ -

「準備できたら下に降りて来てね！」

「おう！待つてろ！」

「うん！」

よつしや！これキタベ！うん！すぐ着替えて奈々葉の為にイクベ！
俺は即座に着替えて下に降りた。

「はやつ！ 早かつたね！」

愛しの奈々葉の為せ!

「ハリエ」、やじ、

俺と奈々葉は玄関を出た。

第7話 妹とトークの2

今日は晴天でなかなかいい日だなあーー「これはトークには最高の日だなあー！」

変なこと考えないようにしなことマザロリ変態ナルシストになってしまつ。

とつあえず普通に奈々葉の付添いなんだしのんびりしゃべつ。

「ねえ優二ーー。」

「どうした？」

「あれ…………」

奈々葉が指差すまつを見ると…………田香なんだ。何故に田香さんが…………見つかったら非常にやばい。」

「奈々葉ーーとりあえず逃げるぞーー！」

「遅いと困つよ…………」

「優祐ひやーん」

「なー！」

「あーーー奈々葉ちゃんもー久しぶりねえー

「田香先輩お久しぶりです。それで何をしてるんですか？」

「おれちやん」とかねて、おれちやん

った！」

「田舎ちゃんが今まで延ばして忘れるのはダメだつてー。」

「あら、そう?まあいいわ。ところで一人で今日は何してるの?」

「今日せ兄さんにはこの通り来てもりおひじ悪ひて。」

「それで優祐ちゃんもいるのね」

「とりあえず優祐ちゃんは止めてください。なんか悲しいです！」

「気にしない！」

「なんで奈々葉が答えたんだよー。」

「え
……
成り行き

うわあーなんか奈々葉が田舎さん見たいに見えてきたよ。

「まあ私はお一人の邪魔しないように帰るわね！」

「はい。……つてそんな兄弟でやましい事なんてないですし。まし

レーベンがマゼロリを驚かせたのである。

グスン。

「あれ？ 優にいなんで泣いてるの？」

「田に」「ミが入ったんだよ……グスン。」「俺はいじられてるのかな……グスン。

「つて事でお一人さん私は帰るわねえ、また今度ゆっくり話は聞かしてもらつから」

円香さん……とりあえずなにもきかないでね。何されるかわからないうから。

「じゃ、行こ」

「、」「……」てを組んでくるなんてちょっと積極的じゃないか！お兄ちゃん理性が保てなくなつちやつぜー

「どうで優に？」

「な、なんだ？」

「なんで私たちばてを組んでるの？」

「手を組んで来たのは奈々葉のほうじやないか　お兄ちゃんは嬉しいぞ！」

スパーーン！

「奈々葉の蹴りが鼻のこ辺にー！」

「つねにこ変態。」

スパーーン！

「角だけ……」

「ゴリッ。

「ふ……」

「ちょっとやりすぎたかも。優にい大丈夫?」

「ふ……」

「?」

「ブツフロン……」

「ゴリュッ。

「ぐはあ……」

そのまま優祐は気を失った。

第8話 妹とトーントの3

海岸の中俺はいた。そこは小さなとぎに父さんに連れていつてもらった事のある小さな小さな海岸。その海岸の砂浜に立っているのは小さな少女その首には小さな小さな真珠のネックレスをつけていた。

顔から腹から色んな場所の痛みを感じて俺は目を覚ました。そこは、公園だった。雲一つない晴天で公園内では小さな子供たちがわいわいと遊んでいる。

「何時間俺は気を失つてたのだろう。確かに奈々葉に蹴られて気をうしなつたんだよな。つかなんか柔らかい枕だな。つか公園に枕なんてあつたっけ？」

それが何か確認するために体を起こしてみた。すると、

「あ、起きた?」「なんだ。奈々葉だったのか…………ってえええつー?」

「な、なによ!」

「な、奈々葉がひざ枕してくれたのか!?」

「そ、そりだけど?」

ああなんて俺は勿体ないことをしたんだー!もつと寝ときたかつたぞ!

「とりあえず奈々葉。」

「なに?」

「もう一度やつてくれないか!」

「コココシ。

「うわあー足をかかとで踏むなーしかもヒールだから足に足に刺
るるー!」

「ハハセコ。この変態ナルシスト。」

「最近なんか暴力おおいべ?」

「とりあえず行きましょ。」

「見事にシカトですか! そうですか!」

「はい優にいは黙つてついてくる。」

「はい……グスン。」

俺これでも主人公なのになあ……

「ハハハ、ハハハー!」

奈々葉が指差して向かっている先は……へ?ランジエリーショップ?

「優に、早く～。」

「まさかね！」

「アリランジショップだよな？」

「アリランジショップだよな～」
おこおこ。兄がやん理性が保てなくなつたやつ。

奈々葉がてくてくとあるこて向かつた先には小さな一角にある小さな店に入った。そこは、

「小さな巨人……フロイウォンの店？」

そこはランジショーリーショップの一一番端っこにある小さな小物ショップだった。

「……なんで？」

「ここは店の店主がアリランジショップだと変態だなどに心配と小物が揃つてゐるの～。」

「アリランジショーリー奈々葉様、よつとアリランジショーリーました。」

「またきたよ変態～。」

「フロイウォンちょっと悲しいです。」

「まあここや、行こ～。」

「おや？彼氏様ですか？」これは始めてまして、私はこの店の店主フュイウォンと申します。」

「俺は彼氏じゃなくて兄弟です。」

「わつでしたか。ん~男にしては勿体ない可愛さですね。」

「優にいはれでいいのーととりあえず来てー。」

そういうて連れてこられた場所は.....

「かわええ.....」

「でしょー！優にいかわいい物好きだつたから買つてあげる」

「マジでー！？じゅ遠慮なく。」

10分迷いに迷つて買ったのは、犬と猫がじゅれている小物と、イ
ルカがサーファーとじゅれている小物にした。

「あれ？値札がついてない？フュイウォンさんー。」

「それですか。それなら一いつで五百円です。」

「へ？安すぎません？」

「貴方なら大切にしてくれると想つてその値段をつけさせてもらいました。ついでにこれも差し上げましょー。」

差し出して来たのは小さな真珠のネックレスだった。これはさつきの公園で見た夢に少女がつけていたネックレスと一緒にものに見えた。

第九話 妹と真珠とお織わざ。（前編）

なんかおかしい文章になつてますが、仮にせす、読んでくださいーーー！

第9話 妹と真珠とお爺さん

小さな夢を見た。小さな公園に小さな少女。そして少女。少女の手には小さな真珠のネックレス。少年の手には小さな真珠のブレスレット。少女は言った。

「また会えるよね？」

少年は笑顔で「ううん」答えた。

「うそー。」

.....

.....

.....

「優しい？優しくってばー。」

「ああどうした奈々葉？」

「わざわざからばーっとしてばっかりじゃないー。」

「ん~なんか引っ掛けられることがあつてね~」

「ひっかかる」と~。

「うん。 フロイウォンさんがくれたネックレスの事だよ。」

「あのネックレスがどうしたの？」

「気絶してたときに見た夢と一緒にネックレスなんだ。」

「どんなはなし？」

俺は奈々葉に向つて夢で見た事を話してみた。

「ふ~うつな。」

感心つかう~やつぽ話さない方がよかつたかも…

「それにしてもなんでフロイウォンさんはあのネックレスをくれたんだ？」

「優しいが可愛かったから？」

「あのなあ……」

「だつてよくわからないもん!」

ブイツとやつぽを向いて歩いてしまった。とりあえず追い掛ける。

「なによ~。」

「ふてゐる理由わからな~いぞ?」

「うるせーーー！」

「うわ、ばかっ！鞄の角を鼻に当てつぶ！」

「あ。また鼻にいつちやつた。テヘッ！」

「ぐわあ～鼻が……しかもテヘッて……かわいいじゃネーか！」

「まあいいや。とりあえず優にい今日はありがとねー！」

「いいって。いろいろと買つてもらつたからー！」

でも一つ謎が出来たけどね。

フェイウォンさんがくれたネックレスと………あの人ガヅラかどうか！
かなりキニナル！

「そついえば優にい？」

「ん？」

「晩御飯の材料買つて帰らなきや。」

「お？今日は奈々葉が作るのかー！」

「うんー。」

うちの家族の中で料理を作れる人が奈々葉と親父だ。だが親父は派

遣で今口サンゼルスにいる。

「今日はカレーにしようかなあ……」

「おーいいねー！」

「じゃあいつものスーパー行くか……」

「じゃあいつものスーパー行くか……」

「そ、そうね……」

二人が向かつた先はタイムサービスの品がとにかく安いスーパー不知火だ。タイムサービスの時間には老若男女とわず品に向かつて向かうほどだ。

「つ、ついたわね。」

「よつしゃー！戦争だあ！」

俺はタイムサービスが以外と好きだ。争つて争つて取れたとき最高に気分が良くなるからだ！
その時アナウンスが掛かる。

『はいカレーライス用豚バラ肉100㌘1円-100㌘1円だよ！
3番肉売場！肉がほしいやつはかかるで！いやあ！』

：何故にアナウンスが喧嘩売つてやがる。

「とりあえず行つてくるー！」ぐうああいーーー！」

肉売場に来てみると、

……今日はひびこな。取らせまことパックを弾き空に浮いたやつで氣を引き新しいのを取りに行つてゐるやつ。爺さんを囮に使って取つてゐるやつ。爺さんに殴られてるやつ。とりあえずレベルタカイナ……

「だが！俺は引かない！」ぐうああああいう！」

人込みのなかに地面からヘッドスライディングで滑り込むが……

「これは椅子かのー！らへちゃんじゃなフォツフォツフォツ。」

爺さんが頭の上に正座で座つて離れなくなつた。

「こなんんで肉が取れない！ふぬうおーー！」

爺さんを頭に乗せたまま俺は肉取り合戦にさざざる。
くそつ！頭が重い。

「爺さんー。」

「なんじや、若いの。」

「力を貸してくれー！」

「いいじやねー。」

はやつーまあいいー

「任せたよー」

その瞬間首に更に激痛が走る。よく見ると、

「がきどもがー・ひーへんじゅねーー。」

ハハハ。みんな固まつてますよ。その隙に肉ゲットー・やつぱカレーには肉がないと始まらないからねー！

⋮
⋮
⋮

「いい買い物したーーー！」

「やつだねえーこれでカレーが作れるねーーー！」

「やつと家についたーーー！」

「優にいーーー！」

「ん？」

「今日はついてきてくれてありがとねーーー！」

その時……

「小さな真珠の……ネックレス？」

「え？ ビーフしたの優にいーーー？」

「さつき夢で小さな少女がしていたネックレスと一緒に奴を持つてた人がいたような……」

「きのせいだよ~早く家に帰ろ~よ~。」

「ちよつと見てくる~。」

「え?ちよ~。」

俺はさつきみた少女を追い掛けたが、見失っていた。

「ま、帰るか。お腹空いたし。」

そのまま家に帰った。案の定奈々葉が怒っていた。

「タ」「~。」

タ」「~。」

「ふう。とりあえずお腹も膨れたから風呂に入るか。

「いいねえ~この温度がいいんだよ。」

俺ん家の風呂は少し小さめだが最新の湯沸かし機に音楽が聞けるテレビも付いている。これはオフクロが付けた。ただ風呂のとき体操のお兄さんを見るためらしい。

俺は自分が持つてきただけを聞きながら夢の事を考えていた。

「とつあえずなにかに巻き込まれていそうだな……ま、いつか。」

そのまま風呂から上がり自分の部屋に上がった。そして今日奈々葉に買つてもらった小物を飾りつて思い出してみると……

「粉々…………？」

原型がないくらい粉々になつていた。奈々葉の鞄に入れてたのがダメだつたみたいだ。見つかつたら殺される。

「優にいー。」

「な、なななな奈々葉！」

「小物飾らないの？」

「まだいいかなあつてね。ハハハ。」

「ばれないとれ。」

「飾らないんだーじゃあみして？」

「や、やばー。」

「いや俺だけの楽しみに……」

「優にいとつあえず原型がないよね？」

「奈々葉の鞄に入れてたのが悪かつたみたいだね。」

「とりあえずお休み。」

ズドッ……

腹部に鋭い蹴りが入りました～！…………おやすみなさい…………グスン。

第10話 未知との遭遇（前書き）

テストやらなんやらでかけませんでした。またこれから頑張るので高校生日記？をお願いします

第10話 未知との遭遇

「なんでこんなことになつてんだよ。」

それはあなたがある意味幸運だからだよ。

早朝。

朝早く俺は目が覚めたため外に行くことにした。今朝は7月というのに肌寒い。とりあえずポケットから愛用のセブンスターを出し口に一本くわえ慣れたように火を付けた。

「ふう～朝の一服はうまいな…………ん？」

ふと公園を見てみると小さな女の子がいた。優祐はさすがに朝の5時からラジオ体操待ちや遊ぶ子はいないと思い声をかけてみるとした。

「ねえねえ。朝早くから一人で何してるの？君一人なの？」

少女は俺を気にせずに黙々と砂場で遊んでいた。

（変な子だなあ…………しかもシカトだし）

とりあえず散歩を続けよつと思いあるこいつとすると、

「ある人を待つてゐる。」

その言い方は、物凄い静かだった。

「誰を待つてゐるの？おとうさん？おかあさん？おじいちゃん？おばあさん？」

「…………」

し、しまったーちょっと抜けを狙おうとしたら物凄いシワけた目で見られた。こりゃあおばあさんもビックリして入れ歯を抜かすね！「私が待っているのは、終わりの始まり。」

「…………？」

優祐はこの少女が何を言っているかわからなかつた。なんかのゲームかなんかかな？

「まさかゲームの何かかとおもつてないよね？」

「ばれたーってかばれてる……エグエグ泣こちゃこそつ……エグエグ。」

「私は、世界から世界を救つたためにやつて來た。終わりの始まりと言つのは、文字通りだが、ここにいれば余ると思つて遊んでいる。」

「

優祐は、一息煙を吸い込み、ふーとほこほこと呟つた。

「よくわからないよ？話の内容も読めないし。世界から世界を救つひーべーゅつ」と？」

「今世界は、世界に飲まれゆつとしている。やつで世界が世界に飲まれない為に私たちがいる。」

「まつたくわからんな。第一お前はなんでこんなことするんだ？」

「人類が世界に飲み込まれないよつ。」

「とつあえずそん小さな体でなんで世界を守れるのか?」

「動きやすいよつにしてるだけよ。元に戻つてあげる。」

すると、小さかつた体が見る見るつむけ俺らと同じぐりこの年齢になつた。体型はモデル体型で、髪はどこまでも漆黒で、肩の下まで伸びている。慎重は優祐と一緒にかけよつと低めだ。

「これで理解したか?」

「あ、ああ…」

くわえていた煙草を消し、携帯用の灰皿にいた。

「んで、終わりの始まりつて?」

「ああ。君は一日の終わりつていつだと思ひつ。」

「夜の1-2時、じやないの?」

「違うな。確かに日にちが変わるのは深夜1-2時だ。だが、それが終わりの始まりになるのか?」

「……」

「つまり、終わりの始まりつてのは、一日で何かが変わつて何かが終わるときつてことだ。」

「つまつ、終わりの始まりつてのは、一日で何かが変わつて何かが終わるときつてことだ。」

「太陽が沈んで月が出るときわ？」

「そうだ。」

「じゃあ朝方もじゃないか？」

「そうだ。」

「つまり、終わりの始まりはそーゆーひとになるのか。」

「そーだね。だから私は毎日ここで見張っている。終わりの始まりが現れるまで。」

「大変だな。まあ頑張りな。」

「君。レディーを一人で遊ばしていいのか？」

「あんた……つまり寂しいわけ？」

「そ、そんなわけない。私は君にも見てほしいだけだ。この世界を。」

「

「なんで俺なんか？」

「君はなんか懐かしいんだよ。」

「なんだそ……」

「……危ない！」

そういうつて少女は優祐を吹き飛ばした。優祐はわけもわからなかつ

たが理解には時間がかからなかつた。

「まさか……終わりの始まり……か！」

「そーみたいだね。」

「ねえあんた。これって人じゃないか？」

「そうよ。人は何か自分通りに行かなかつたらなにかを怨む。その怨みが溜まりにたまつて爆発したら、それが世界を飲み込もうとする。それがこいつさ。」

なるほど。……つてビーやつてこいつ倒すの？

「心配はいらない。私に任せろ。」

「わかつた！ とりあえず頑張つて！」

だが逃げようとする優祐に終わりの始まりは容赦なく攻撃を仕掛けてくる。

「うわあああ……」

「…………夫ですか？」

え？

「……丈夫ですか？」

「大丈夫ですか？」

目が覚めるとさつきの場所に寝ていた。確か俺は終わりの始まりに殺されかけて……

「ねえきみ！終わりの始まりは？？？」といつたのさ？？？」「なんですかそれ？？？？」

あれ……さくきまでのは夢だったか

「じゃあ私は学校に行かなくてはならないので。」

「な、名前だけでも教えて！」

「すぐ知ることになるのに

「ん? なんかいつた?」

「何も言つてないよ。私は竹内千里。じゃあ私は先に行くね！学校

頑張れ！

そおいつて千里は走つていつた。つてまさか恋の予感か？？？

「ないよ。優にい。」

「な、奈々葉朝早いな！」

「あのまつ8時だよ？」

「え…………とりあえず…………やべえー！」

俺何時間寝つてたんだよ…………俺はマツハで家に帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6414a/>

高校生日記？

2011年1月4日15時33分発行